

さよなら ジャングル街

タウンゼンド 作

亀山竜樹 訳

FOR BOYS AND GIRLS



GAKKEN BOOKS



タウンゼンド，ロウ，ジョン

NDC 933

さよならジャングル街

少年少女学研文庫 (20) 312 P 17.5cm

1970年4月1日 初版発行©

定価 320円

訳者 亀山竜樹 検印廃止

発行人 古岡秀人

編集人 石井和夫

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

株式会社金羊社

製本所 小高製本工業株式会社

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5

振替 東京142930

郵便番号 145



この本に関するお問合せ，製本上のミスなどがありましたら，下記あて文書または電話でお知らせください

東京都大田区仲池上1-17-15 〒145

学研「営業総務部サービス課」児童図書係

電話 (03) 753-7531

8197-538 520-1002

さよならジャングル街

タウンゼンド 作

亀山竜樹 訳
安井 淡 画



少年少女学研文庫

WIDDERSHINS CRESCENT
by John Rowe Townsend
Original English Edition published
by Hutchinson in London

1965

Japanese translation rights arranged
through K.Yano Literary Agency

訳者紹介

1922年、佐賀市生まれ。東京大学印哲科を卒業。英米の児童文学の翻訳ならびに創作に従事。おもな著書に『ぞうのなみだ』『宇宙海賊パプ船長』『空飛ぶドクター』など。訳書に『名犬ラッシー』『ぼくらがまもった金塊』『ルシンダの日記帳』『別れの歌』『ハリス夫人パリへ行く』『ぼくらのジャングル街』など多数ある。

装丁

堀内誠一

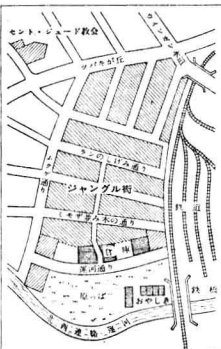
＊はじめに

イギリスのある都市に「ヘジャングル街」というまずしい人びとの住む一画がありました。

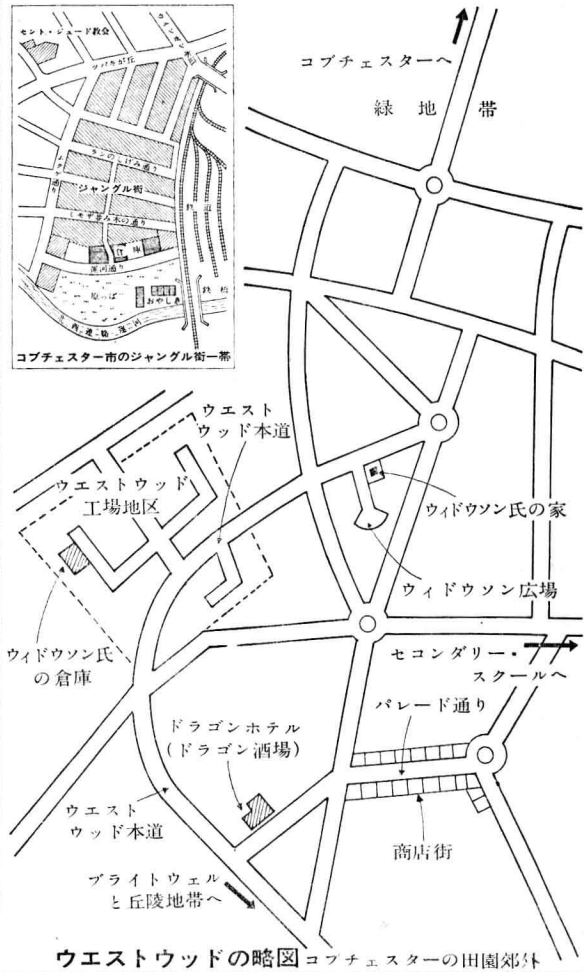
ケビンとサンドラは、そこに親がわりのおじさん夫婦と、ちびのハロルド、ジーンといっしょに住んでいます。ある日、ぐうたらなおじさん夫婦は、家を捨てて、どこかへ行ってしまいました。家賃もはらえぬ子どもたちは、古倉庫にひっこして新しい生活をはじめます。それを友だちのディックや、ボイド牧師たちがたすけようとしますが、いつのまにか、宝石強盗とその一味のたくらみにまきこまれるはめになってしまいます。けれど子どもたちの勇氣は、悪い一味にうち勝つのです。——これが、この物語の姉妹編ともいえる『ぼくらのジャングル街』のできごとです。ここにでてきた人たちがふたたび登場するこの『さよならジャングル街』は、まえのできごととは関係なく、たのしく読めるはずですが、そういうこともあったのだと、ここに、ちょっと紹介しておきます。

ケビンたちにまたもふりかかってきた新しい事件で、べつのたいせつな問題——この世のどこかで、かならずくりかえされている問題をとりあげているのが、この『さよならジャングル街』です。

ある春の日のできごとから、この物語ははじまります……。



コブチェスター市のジャングル街一帯



ウエストウッドの略図 コブチェスターの田園郊外

「ジャングル街にわかれをつげん。」いとこのハロルドが、「ティパラリー」(第一次大戦中、イギリス兵士が行軍のとき愛唱した歌)の節まわしでうたった。「ランのしげみよ、いざさらば。ウエストウッドははるかなり。されどかの地にさすらわん。」

「ぼくには、どうせ、それいじょうにうまいものはひねりだせないけどさ。」と、ぼくはいった。「だけど、人をうるさからせはしないぞ。」

「だって、これは韻をふんでるんだよ。」と、ハロルド。「ぼくはいま苦心してるんだ。」

「うるせえ、じゃまだ!」と、ぼくのおじさんのウォルターがいった。「ケビン、この洗面台に、ちょい、手を貸せ。」

「壁をつぶしちゃうよ、とうちゃん。」と、ハロルドがいった。

「いまは壁のことなんぞ、気にしていられるもんか。」ウォルターは、すばやく見まわした。

「やい、ドリス! 一ぺんぐらいはてつだったらどうだ。サンドラ、毛布をおろせ。ジー——ジーンはどこだ? あいつだって、もうてつだってもいい年だぜ。」

「ジャングル街にわかれをつげん。」 ハロルドがまたうたった。「ランのしげみよ、いざさらば……」

まったく、ジャングル街よさようなら、だ。ジャングル街は、コブチェスター市にある、いまにもくずれ落ちそうな一画だった。その、ランのしげみ通り四十番地にぼくらは五年間住んできた。そしていま、ひっこそうとしている。ここらはぜんぶ、環境整理計画でどんどんこわされていて、ぼくらはウエストウッド地区に新しい家をあてがってもらったのだ。

ぼくらは六人家族だ。まず、おじさんのウォルター。それからぼくと、妹のサンドラ。ぼくはケビンで十五歳。サンドラは、ぼくより一つ年下だ。ぼくらは両親が事故で死んでからずっと、ウォルター——ぼくのとうさんの弟——といっしょに住んでいた。家族はそれから、ハロルドとジーン。ふたりはウォルターの子ともだ。ぼくらきょうだいのことにあたる。ハロルドは十一歳、ジーンは八歳だ。それに、ウォルターの女友だちのドリスがいる。ウォルターのおかみさんが家をとびだしたあと、いっしょに暮らしている。

いまから二年前、ぼくたち一家は、もうすこしで、ばらばらになってしまうところだった。ウォルターとドリスが、ぼくら子どもをおきざりにして、どろんをきめたので、ぼくら四人は、運河のそばのガンブル原っぱにある古倉庫に、ぼくらだけのすみかをつくろうとした。けれど、そのごたごたも解決した。それから、なんとか、はなればなれにならないでやってきた。

といつても、なにもかもうまくいつてゐるわけではなかった。ウォルターとドリスは、けんかをするし、それにセント・ジュード教会の屋根から、鉛がひつpegされたという事件がもちあがつたとき、ウォルターが警察にしょつぴかれ、そのせいで長いこと職がなくてぶらぶらしていた。ドリスは、主婦としてはさつぱり能なしたつたし、家賃はたまりつばなし。そんなわけでぼくらは、ぼくらなりに苦しみをあじわつてきた。だけど、サンドラとぼくは、せいいつばい、年下のふたりのめんどろをみてきた。どんづまりの状態というには、まだちよつぱりましといふところだつた。

何年もうわさにのぼつていた、ジャングル街のとりこわしがはじまつて、ぼくらはとうとうウエストウッドへひっこすことになつた。道には、ぼくの友だちのディックのとうさんの、ジャック・ヘドリーさんが、じぶんがはたらいでいるガレージから借りてきた、一トン半のほろつきトラックがとまつていた。ぼくらが荷物をつみおわりしだい、ヘドリーさんが、人間と家財道具をウエストウッドへはこんでくれることになつていた。そこで新しい生活がはじまるのだ。「おい！」ウォルターがドリスにいつた。「おめえは、あんなにこの家を出たがつてたじゃねえか。だらう？　だつたら、ちつたあてつだつたらどうだ。てはじめに、おめえがみこしをすえているいすを、トラックにつみこみな。」

「わたしや、すわつてゐるよ。」

「すわってると。おめえにや、すわってるとしか、能がねえんだな……」

「おまえさんこそ、じぶんを下士官^{かしかん}とでも思いこんでるみたいじゃないか。」と、ドリスはひにくった。「ああしろ、こうしろと命令^{めいれい}してさ。だけど、だれにもおまえさんのさしずはいらないみたいだよ。」

じっさいは、トラックへのつみこみは、ほとんど終わっていた。ウォルターは口やかましく仕事をいいつけ、ドリスは口答え^{くちこた}をし、ハロルドは、うたって、夢見^{ゆめみ}て、じゃまをして、サンドラとぼくだけが、れいによって、せつせと仕事をした。

ぼくたちはこの数分間、ジーンを見かけなかった。

「ちびは、どこへいったんだ？」ウォルターがぶつくさいった。「すっかり用意^{ようい}はできたってえのによ。」

ウォルターは出入り口へ行って、通^{とお}りのあっちこっちにどなった。けれど、ジーンはあらわれなかった。

「おれがジーンをめつけるから、おめえらはトラックのうしろに乗^のってる。」と、ウォルターはいった。「おれは、ジャックと前に乗るからよ。」

「走りだすまで、わたしや、トラックのうしろにおしこまれるのはごめんだね。」と、ドリスはいった。

ドリスは、ドアのところのあがり段に腰をすえて、エプロンのポケットから、よれよれのタバコを出した。ランのしげみの一画は、一軒だけのこして、あとはすっかりあき家になっていた。窓はどれもぶちわられ、ドアはまきにされてあとかたもなかった。通路にへたなことばや絵が、絵の具でぬりたくってあった。

「どこかのあき家にかくれてやがるんだ。」と、ウォルターはいった。「てっきり、そうにちがいねえ。」

そして、道路のまんなかへ行ってどなった。

「ジーン！ ジーン！ 出てこねえと、しりをひっぱたくぞ！」

ジーンはそれでもあらわれなかった。

「あいつは、こんなときに、なんのつもりで消えっちまいやがったんだ？」ウォルターは、ぶうぶうこぼした。そしてドリスにいった。「やい、ふとっちょ。なんだってジーンを見はってなかったんだ？ 見たところ、おめえはまったくの手持ちぶさたでいたじゃねえか。」

「ジーンはおまえさんのがきで、わたしんじゃないからね。」と、ドリスはいった。

「サンドラ、おめえはジーンが出ていくのを見なかったか？」

「ジーンがなにをやってるかは、わかってるよ。れいのネコをさがしてるのさ。」と、横あいからドリスが気がなさそうにいった。

ぼくらもすぐに、なるほどと思った。ジーンは、だれかがひっこすときに捨てていった、きたない、よぼよぼのおすネコにむちゅうになっていた。このじいさんネコに名まえなんかありはしない。ジーンは「プジイ（にゃんちゃん）」と呼んでいたが、ひいきめに見ても、にゃんちゃんなんてものではなかった。やせていて、にくにくしげなつらがまえで、けんか傷があつた。このじいネコは、ジーンのほかに、だれもよせつけなかった。ジーンとだけは、なにかしら、ふしぎなもうしあわせをすませているらしかった。ジーンは、ねこかわいがりにかわいがり、ネコは、のどをゴロゴロ鳴らして、上ぎげんでジーンの足もとにからだをこすりつけるのだった。

この二、三週間ジーンは、ひんぱんにプジイをウェストウッドへつれていくんだと、宣言していたが、ウォルターはそのたびに、とんでもねえときめつけていた。それが、ひっこしの朝になって、プジイのすがたが見えなくなったのだ。

「そうだな。おれが、あのうすぎたねえ畜生はつれていかねえと、くぎをさしといたからな。」と、ウォルターはいった。「さあ、ケビンとサンドラは、ちびをさがしてこい。遠くにいつてゐるわけはねえ。ハロルド、おまえは、いくな。おまえまでいなくなったら、やっかいの上ぬりだ。おぼちゃんと、ここにのこつてろ。」

ハロルドは、ドリスにくつつかないようにして、ならんで階段に腰をおろすと、しかめつ

らをした。ハロルドは、小がらで、やせていて、金髪で、ウォルターにそっくりだった。

「ジャングル街にわかれをつげん。」と、ハロルドはまたうたいだした。「ランのしげみよ、いざさらば。」

「まだ、おさらばしたわけじゃないよ。」と、ドリスはいった。

ウォルターとサンドラとぼくは、ジーンをさがしにでかけた。

ジーンがかくれることができそうなところは、この地区にはもういくらもなかった。ランのしげみ通りは、とりこわしがいちばんあとまわしになっている通りの一つだった。まわりは、とりこわされてはだかの土地になっていて、がらくたがいっぱいにちらばっていた。いぜんは家がたてこんでいて、何百人かが住んでいたのだ。

ランのしげみ通りの、はしの家の入り口で、おさない、きたならしい女の子が、サ克蘭ボを食べている男の子のせともの人形で、あそんでいた。

「うちのジーンを見なかったかい？」と、ウォルターがきいた。

女の子は、サ克蘭ボ人形をさしあげていった。「となりんちのドアのところで見つけたのよ。」

「うちのジーンを見なかったかい？」

「ほら、サ克蘭ボを食べてる。」女の子は、サ克蘭ボをつまんで、じぶんの口に入れるま

ねをした。

「ジーンを見たかつて、きいてるんだぜ。」と、ウォルターはいった。

おさない女の子は、きょとんとしているだけだった。ウォルターは、女の子の手のせとものを、はたき落とした。人形は階段の上で、二つにわれた。女の子は両手にわれたかけらを持って、がっかりしていたが、泣きはしなかった。ウォルターは大またに歩きだした。

ジャングル街のめぬき通りだったムクゲ通りには、居酒屋のジョージの店と、二軒の商店がまだのこっていた。くっついていた家がとりこわされたあとは、板でふさいであった。

「もう、店をあけてやがる。」と、ウォルターはいった。「おまえらふたりで、ジーンをさがすんだ。いいな？ 遠くにいるわけはねえ。おれはちょいビールをひっかけるぜ。」

サンドラとぼくは、顔を見あわせた。

「ヘドリーさんに、まだ出発できないといつといたほうがいいわ。」と、サンドラがいった。

「たぶん、わたしたちを待つてるわよ。」

ブラジル通りにはいると、どれがヘドリーさんの家か、すぐにわかる。家の外がわにはペンキがぬってあり、窓にはきれいなカーテンがかかっていて、入り口のがり段は、きれいなクリームがかった黄色にみがいてあった。

ディックのかあさんがドアをあけて、サンドラを見ると顔をかがやかせた。このおばさんは

小がらで、やせていて、りはつそうな顔をしているが、口がわるい。けれど、ぼくたちにはしんせつで、サンドラをじぶんのむすめのように、かわいがっている。

「うちのジーンがいなくなったんです。」と、サンドラがいった。「それで、ヘドリーおじさんに、まだちょっと出発しゅつぱつできないってつたえてください。見つかったら、すぐにお知らせしますから。」

「ああ、そうかい。うちの人もてつだうだろうよ。」と、おばさんはいった。「いま、くつをはいてるところだよ。ディックは仕事でね。」

ディックは学校を卒業そつぎょうして、印刷工場いんさつこうじょうの見習い工みならこうになっていた。

「おはいりよ。」と、おばさんはつづけた。「長くひきとめはしないよ。それにジーンだって、どうってことはないだろうし。あの子はおちびのわりには、しっかりしてるからね。」

ぼくらは、ヘドリー家けにあらこんだ。ヘドリーおばさんは、大そうじでもしていたみたいなのうすだった。ブラジル通りどおも、ほかの通りとおなじようにとりこわされるのだし、ヘドリーさんのところも、この二、三週間のうちには、ひっこすはずだった。「きちんとしておかないとね。」と、ヘドリーおばさんは説明せつめいした。「いま、壁かべをあらってたところなんだよ。」

「だけど、ひっこしたあと、ここがどうなるかおばさんも知ってるはずなのに。」と、ぼくはいった。「ほかのあき家やとおなじように、ばらばらにこわされちまうだけなのになあ。」

「かまわないね。わたしにや関係かんけいのないことだよ。わたしや、いつも家をきれいに、最後さいごまできちんとしておきたい性分しょうぶんでね。家のかぎをわたすまではね。それからあとのことは、どうなろうと知ったことじゃないよ。」

「うちのおばさんは、この家のせわをやくことで頭がいっぱいなさ。」入り口に出てきながら、ヘドリーおじさんがいった。むすこのディックとそっくりの、もじやもじやの赤っ毛で、がんじょうなからだつきだ。おばさんのほうは、髪かみに白いものがまじっている。

「わたしや、そのうえに、おまえさんのせわもせにやならないしね。」と、ヘドリーおばさんはそっけなくいった。「わたしがしてあげなかったら、どっちがあんたで、どっちがディックか見わけもつかないほど、よごれっぱなしでいるだろうからね。だよ、サンドラ？」

「そうね。きっと見わけがつかないわ。」サンドラは、おだやかにいった。でも、サンドラなら、見わけをつける。

「ところで、てちがいがあったようだが。」と、ヘドリーさんがいった。「なにか、まずいことでもあったのかい？」

「いいえ、たいしたことじゃないんです。ジーンが、雲がくれしちゃった、それだけのことです。なんてことはないと思いますけど。でも、見つけるまで出発しゅつぱつできないってことを、おじさんに話しておかなきゃと思って。」

「わしも、てつだつてさがそう。ウォルターおじさんはどこだね？」

「ジョージの店^{みせ}で、いっぱいやってるわ。」

「へえ。よしきた、では、はやいとこさがしてみよう。ブレイスウェイトばあさんが、店でジーンを見かけてるかもしれないね。きいてみてごらん。わしは通り^{とほ}をまっすぐにいってみよう。」
ブレイスウェイトばあさんの店は、ジョージの店のすじむかいにあった。かどっこのなんでも屋^やだが、いまはそうなんでも売っているわけではなかった。家なみがなくなつてかどにぼつんととりのこされたんでは、商売^{しょうばい}なんかあがつたりだ。店のとなりからは、ずうっと一軒^{けん}のこらずとりこわされていた。「うちのジーンを見ませんでしたか？」と、ぼくはきいてみた。

ブレイスウェイトばあさんは、たぶん八十そこそこだ。ばあさんの子どもたちは、みんなよそへいってしまつて、せいぜいクリスマスのカードをおくつてよこすくらい。あとはだれもなしのつぶてで、まったくのひとりぼっち。ちよっぱり頭がおかしくなりかけていた。

「いんや、ジーンは見なかったよ。」と、ばあさんはいった。「わたしが、なんで、おまえんとこのジーンを見かけてるもんかね。きょうびは、わたしや、だれにもあいやしないんだよ。きょうも、午前中^{ごぜんちゆう}、お客^{きやく}がたったのひとりつてさまだからね。」

ぼくらが、店^{みせ}を出ていこうとしても、ばあさんはおしゃべりをやめなかった。

「それに、そのお客つてのが、ネコのえさを一かん買いにきた、ちよっぱけなむすめっ子なんだ